

2006年全国ジュニア合宿報告

JCFジュニア部会委員 折本 裕樹

期 間 平成18年10月26日(木)～29日(日)

会 場 日本サイクルスポーツセンター(北400m)

本年の全国合宿は昨年の反省をもとに全面改訂され実施された。昨年まではブロック合宿の上に更に選抜・選考された選手を集めて行って来たが反省点として十分に強い選手が選考されて来ていないというブロック格差の是正。また、JOCジュニア選手強化事業と高体連事業であるブロック合宿は趣旨や目的が違うことから、JOC事業は選手強化色を強く、ブロック合宿は普及指導色を強くする狙いがあった。現在、JCF支援スタッフイコール高体連強化委員という形を何とか昨年完成させJCFカテゴリージュニアの育成強化を支援する立場での兼務である。JCFジュニアは高体連に留まらず、大学生ジュニア、実業団ジュニアも含めて総合的に関与しなければならない。

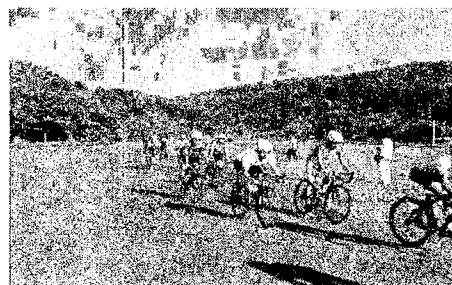
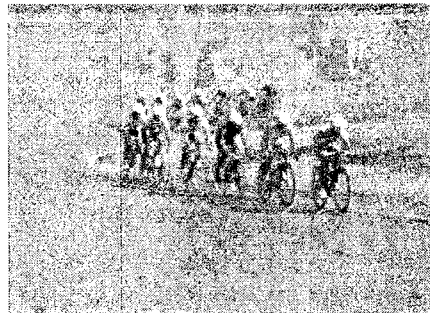
また、他の海外遠征の大部分はJCF事業のためにそのことについてもご苦労をかけている。

実施要項の作成と参加申し込みには中田委員(千原台)、トラック計画と進行役には大野委員(八戸工業)ロード計画と進行役に上野委員(和歌山北)の各委員が尽力され、他の支援コーチはそれぞれトラック担当、ロード担当に分かれ、円滑に運営できるための総務的な仕事を折本、更に高体連へ委嘱という形で審判関係を技術審判委員から高畑委員長、総務関係を早川委員長へ依頼した。更に本年の大きな特徴は高体連外からJCF支援スタッフである北見裕史(スーパーKアスリートラボ)にもご尽力を頂いた。それだけの人員だけでは円滑に動かす引率の顧問の先生方の協力無しでは実施不可能であったと感じる。実際の許可が下りたのが9月に入ってから、当初予定していたサイテルがねんりんピック静岡開催で満室状態、旅行代理店紹介の宿が要項が出た後に倒産により閉館の通告、四方手を尽くし何とか規定料金で収まる、しかも、同一宿舎で確保ができた。

また、JOCからの補助金は事業終了、報告書完了後であるためJCFからの立替が完了したのが合宿前日であった。これからの大きな課題であるがJOC事業を円滑に進めるために補助金については誰かが一括で立て替えるか、若しくは事業

終了後に補助を出すスタイルになることも視野に入れなければならない。申込み状況に関しては全国から満遍なくというより、心ある選手を熱心に指導する顧問からの申込みであると感じた。

今回の合宿は昨年まで9月の連休に行っていたが、国体開催時期の早まりを受け、国体終了後の方が選手・顧問ともに参加しやすいという理由から10月下旬とした。今回の試みとしてロード班のトラック周回練習やトラックではスターティングブロックの使用など公認競技会さながらの内容で実施した。トラック担当の北見委員からの講習も選手から大変好評であった。



平成18年度全国ジュニアトラック・ロード合宿 **トラック総合成績**

2006/12/6 19:31

期日：2006年10月26日（木）～29日（日）：日本CSC北400mトラック

男子

総合順位	No	氏名	学校名	都道府県	合計点	1 km T.T.	km/h	順位	3 km I.P.	km/h	順位	200m T.ベスト	km/h	順位
1	5	長島 大介	作新学院	栃木	13	1分 8秒 990	52.864	3	3分 43秒 97	48.221	4	11秒 348	65.248	6
2	19	山下 一輝	誠英高校	山口	14	1分 9秒 330	52.149	4	3分 45秒 65	47.862	7	11秒 210	65.330	3
3	7	磯田 旭	作新学院	栃木	16	1分 9秒 961	52.101	5	3分 43秒 71	48.277	3	11秒 416	65.208	8
4	16	深谷 知広	桜丘	愛知	18	1分 8秒 010	52.940	1	3分 54秒 31	46.093	16	10秒 810	71.421	1
5	2	相笠 翔太	白河実業	福島	22	1分 10秒 950	51.359	10	3分 42秒 30	48.583	1	11秒 564	65.121	11
6	6	雨谷 一樹	作新学院	栃木	23	1分 8秒 470	52.905	2	3分 54秒 59	46.038	19	11秒 146	65.368	2
7	22	利根 正明	別府商	大分	25	1分 10秒 260	51.409	6	3分 47秒 25	47.525	9	11秒 510	65.152	10
8	10	柿澤 大貴	岡谷工	長野	26	1分 11秒 100	50.697	11	3分 44秒 93	48.015	6	11秒 473	65.174	9
9	25	新納 大輝	鹿実	鹿児島	30	1分 11秒 120	50.696	12	3分 50秒 99	46.755	11	11秒 355	65.244	7
10	23	魚屋 周成	日出陽谷	大分	32	1分 10秒 590	51.385	7	3分 51秒 90	46.572	13	11秒 586	65.108	12
11	24	田中 陽平	千原台	熊本	36	1分 10秒 630	51.382	8	3分 48秒 23	47.321	10	11秒 730	65.023	18
12	20	沢田 勇治	誠英高校	山口	37	1分 10秒 660	51.380	9	3分 51秒 94	46.564	14	11秒 642	65.075	14
13	12	田口 泰生	岐阜第一	岐阜	41	1分 12秒 200	49.986	15	4分 00秒 28	44.948	21	11秒 345	65.250	5
13	15	加藤 良治	岐南工	岐阜	41	1分 12秒 250	49.983	17	3分 44秒 86	48.030	5	11秒 809	64.977	19
15	13	岡崎 祥伍	岐南工	岐阜	44	1分 11秒 980	50.634	14	3分 45秒 73	47.845	8	12秒 051	59.975	22
16	17	加藤 正法	桜丘	愛知	45	1分 12秒 295	49.980	18	4分 05秒 42	44.006	23	11秒 261	65.300	4
17	4	山崎 真之介	作新学院	栃木	46	1分 13秒 931	49.252	21	3分 51秒 16	46.721	12	11秒 633	65.080	13
17	11	森 啓	岐阜第一	岐阜	46	1分 12秒 240	49.983	16	3分 52秒 31	46.490	15	11秒 670	65.058	15
19	18	野口 正則	権生昇陽	奈良	47	1分 11秒 940	50.637	13	3分 54秒 42	46.071	17	11秒 717	65.031	17
20	14	高橋 翔太	岐南工	岐阜	50	1分 14秒 360	48.625	24	3分 43秒 45	48.333	2	12秒 355	59.823	24
21	1	後藤 勝也	白河実業	福島	53	1分 12秒 650	49.955	19	3分 54秒 47	46.061	18	11秒 681	65.052	16
22	9	新井 由都	小松原	埼玉	63	1分 14秒 180	48.637	22	4分 00秒 01	44.998	20	11秒 885	64.932	21
23	8	今井 一誠	昭和第一学園	東京	64	1分 13秒 810	49.260	20	4分 07秒 98	43.552	24	11秒 851	64.952	20
24	3	大原 勝	白河実業	福島	68	1分 14秒 240	48.633	23	4分 02秒 01	44.626	22	12秒 352	59.825	23
25	21	山地 大介	鳳鳴総合	香川	75	1分 秒	VALUE!	25	分 秒	VALUE!	25	秒		25

女子

総合順位	No	氏名	学校名	都道府県	合計点	500m T.T.	km/h	順位	2 km I.P.	km/h	順位	200m T.ベスト	km/h	順位
1	3	近藤 美子	愛工大名電	愛知	6	38秒 940	47.252	1	2分 51秒 61	41.956	2	12秒 979	59.514	3
2	5	柁原 彩	千原台	熊本	7	39秒 910	46.046	4	2分 41秒 51	44.579	1	12秒 800	59.603	2
2	7	石川 菜々子	笠田	香川	7	39秒 090	46.143	2	2分 53秒 90	41.403	4	12秒 758	59.623	1
4	2	田中 まい	千経大附高	千葉	12	39秒 790	46.061	3	2分 54秒 76	41.199	5	13秒 049	55.364	4
5	1	大崎 詩穂	八戸工業	青森	15	41秒 010	43.901	5	2分 53秒 87	41.410	3	13秒 983	54.969	7
6	4	吉野 茉莉亜	愛工大名電	愛知	18	42秒 940	42.761	7	2分 59秒 50	40.111	6	13秒 280	55.266	5
7	8	廣本 茜梨	別府商	大分	19	42秒 080	42.849	6	3分 02秒 59	39.433	7	13秒 850	55.025	6
8	6	木村 亜美	石田	香川	25	43秒 280	41.833	8	3分 08秒 49	38.198	9	14秒 276	51.327	8
9	9	上原 彩葉	別府商	大分	26	43秒 720	41.790	9	3分 04秒 65	38.993	8	14秒 600	51.209	9

S i g n .

平成18年度全国ジュニアロード強化指定選手(男子)

NO	ヘルメットNO	ボテーパーNO	氏名	フリガナ(半角)	男女	学年	学校名(略称)
1	115	515	吉田 隼人	ヨシダ ハヤト	男	2	榛生昇陽
2	111	511	中田 匠	ナカタ ナル	男	2	紫波総合
3	116	516	入部 正太郎	イリベ ショウタロウ	男	2	榛生昇陽
4	117	517	本馬 陵	ホンマ リョウ	男	2	平工業高校
5	119	519	堀内 俊介	ホリウチ シュンスケ	男	2	横浜
6	122	522	野中 竜馬	ノカリュウマ	男	2	広島国際
7	112	512	窪木 一茂	クボキ カズシゲ	男	2	学法石川
8	114	514	鷲田 義明	シマダ ヨシアキ	男	3	川越工
9	135	535	清水 峻	シミズ ジュン	男	1	日出暘谷
10	121	521	青山 裕矢	アオヤマ ユウヤ	男	2	石田

平成18年度全国ジュニアロード強化指定選手(女子)

1	136	536	針谷 千紗子	ハリガイチサコ	女	2	作新学院
2	140	540	明珍 裕子	ミノウチン ユウコ	女	2	鹿児島実業

平成18年度全国ジュニアトラック・ロード指定選手強化合宿 27日模擬レース結果

日本CSC 5kmサーキット 男子 8周回 女子 5周回

NO	ヘルメットNO	ホテーパーNO	氏名	フリガナ(半角)	男女	学年	学校名(略称)	time	順位
1	115	515	吉田 隼人	ヨシダ ハヤト	男	2	榛生昇陽	1 : 15'47	1
2	116	516	入部 正太郎	イベ ショウタロウ	男	2	榛生昇陽	1 : 16'03	2
3	122	522	野中 竜馬	ノカリュウマ	男	2	広島国際	1 : 17'47	3
4	121	521	青山 裕矢	アオヤマ ユウヤ	男	2	石田	1 : 17'58	4
5	117	517	本馬 陵	ホンマ リョウ	男	2	平工業高校	1 : 18'27	5
6	113	513	青柳 憲輝	アオヤナギ カズキ	男	3	作新学院	1 : 20'11	6
7	112	512	窪木 一茂	クボキ カズシゲ	男	2	学法石川	1 : 21'06	7
8	111	511	中田 匠	ナカタ ナル	男	2	紫波総合	1 : 21'10	8
9	120	520	相川 巧	アイカワ タクミ	男	2	川越工	1 : 22'28	9
10	114	514	鷹田 義明	シマダ ヨシアキ	男	3	川越工	1 : 22'29	10
11	118	518	和田 良太	ワダ リョウタ	男	2	作新学院	1 : 22'30	11
12	119	519	堀内 俊介	ホリウチ シュンスケ	男	2	横浜	1 : 24'02	12
13	124	524	望月 慶	モチズキ ケイ	男	2	川越工	1 : 24'16	13
14	135	535	清水 峻	シミズ シュン	男	1	日出暘谷	1 : 24'16	14
15	129	529	藤井 敬弘	フジイ タカヒロ	男	3	石田	1 : 25'44	15
16	127	527	若松 孝之	ワカマツ タカユキ	男	2	朝明	1 : 25'45	16
17	126	526	小巻 和仁	コマキ カズヒト	男	2	川越工	1 : 25'45	17
18	123	523	山國 渉	ヤマクニ ワタル	男	2	千原台	1 : 26'04	18
19	132	532	山内 康平	ヤマウチ コウヘイ	男	2	岐南工	1 : 30'23	19
20	130	530	柴田 宗幸	シハタ ムネユキ	男	2	愛工大名電	1 : 34'34	20
21	125	525	武田 耕大	タケタ コウダイ	男	2	川越工	1 : 35'39	21
22	128	528	落合 秀俊	オチアイ ヒデトシ	男	2	高田		DNF
23	131	531	赤尾 廣道	アカオ ヒロミチ	男	2	愛工大名電		DNF
24	133	533	丹羽 泰雄	ニワ ヤスオ	男	1	岐南工		DNF
25	134	534	鳥海 智大	トリウミ トモヒロ	男	1	昭和第一学園		DNF
26	136	536	針谷 千紗子	ハリガイ チサコ	女	2	作新学院	1 : 0'59	1
27	140	540	明珍 裕子	ミノウチン ユウコ	女	2	鹿児島実業	1 : 03'53	2
28	138	538	玉井 千晶	タマイ チアキ	女	2	高松工芸	1 : 07'13	3
29	139	539	中根 礼音	ナカネ アヤネ	女	2	愛工大名電	1 : 11'26	4
30	137	537	池部 真知	イケベ マチ	女	1	別府商	1 : 11'51	5

平成18年度全国ジュニアトラック・ロード指定選手強化合宿 28日模擬レース結果

日本CSC 5kmサーキット 男子 12周回 女子 10周回

NO	ヘルメットNO	ポスターNO	氏名	フリガナ(半角)	男女	学年	学校名(略称)	time	順位
1	115	515	吉田 隼人	ヨシダ ハヤト	男	2	榛生昇陽	1 : 59'01	1
2	111	511	中田 匠	ナカタ ナル	男	2	紫波総合	1 : 59'01	2
3	116	516	入部 正太郎	イリベ ショウタロウ	男	2	榛生昇陽	1 : 59'01	3
4	117	517	本馬 陵	ホンマ リョウ	男	2	平工業高校	1 : 59'01	4
5	119	519	堀内 俊介	ホリウチ シュンスケ	男	2	横浜	1 : 59'30	5
6	112	512	窪木 一茂	クボキ カズシゲ	男	2	学法石川	2 : 04'29	6
7	114	514	嵐田 義明	シマダ ヨシアキ	男	3	川越工	2 : 04'51	7
8	122	522	野中 竜馬	ノナカリウマ	男	2	広島国際	2 : 05'14	8
9	135	535	清水 峻	シミス ジュン	男	1	日出暘谷	2 : 05'31	9
10	121	521	青山 裕矢	アオヤマ ユウヤ	男	2	石田	2 : 05'38	10
11	113	513	青柳 憲輝	アオヤナギ カズキ	男	3	作新学院	2 : 06'14	11
12	124	524	望月 慶	モチスキケイ	男	2	川越工	2 : 06'54	12
13	120	520	相川 巧	アイカワ タクミ	男	2	川越工	2 : 08'30	13
14	125	525	武田 耕大	タケダ コウダイ	男	2	川越工	2 : 10'05	14
15	129	529	藤井 敬弘	フジイ タカヒロ	男	3	石田	-1 LAP	15
16	126	526	小巻 和仁	コマキ カズヒト	男	2	川越工	-1 LAP	16
17	127	527	若松 孝之	ワカマツ タカユキ	男	2	朝明	-1 LAP	17
18	123	523	山國 渉	ヤマクニ ワタル	男	2	千原台	-1 LAP	18
19	118	518	和田 良太	ワダ リョウタ	男	2	作新学院	-1 LAP	19
20	132	532	山内 康平	ヤマウチ コウヘイ	男	2	岐南工	-1 LAP	20
21	134	534	鳥海 智大	トリウミ トモヒロ	男	1	昭和第一学園	-1 LAP	21
22	128	528	落合 秀俊	オチアイ ヒデトシ	男	2	高田	-1 LAP	22
23	130	530	柴田 宗幸	シバタ ムネユキ	男	2	愛工大名電	-1 LAP	23
24	131	531	赤尾 廣道	アカオ ヒロミチ	男	2	愛工大名電	-2 LAP	24
25	133	533	丹羽 泰雄	ニワ ヤスオ	男	1	岐南工		DNS
26	136	536	針谷 千紗子	ハリガイ チサコ	女	2	作新学院	1 : 59'57	1
27	140	540	明珍 裕子	メイチン ユウコ	女	2	鹿児島実業	2 : 05'00	2
28	138	538	玉井 千晶	タマイ チアキ	女	2	高松工芸	-1 LAP	3
29	139	539	中根 礼音	ナカネ レネ	女	2	愛工大名電	-1 LAP	4
30	137	537	池部 真知	イケベ マチ	女	1	別府商	-2 LAP	5

2007年度 全日本アマチュア選手権大会トラック・レース
高体連代表チーム ノミネートリスト

2006. 10. 28

チーム・スプリント

推薦順位	氏名	学校名	都道府県名	選考会の成績								総合順位	得点
				1kmタイムトライアル		順位	FS200m		順位	SS400m			
1	深谷 知広	桜丘	愛知	1 分 8 秒 010	1	10 秒 810	1	27 秒 52	2	1	4		
2	雨谷 一樹	作新学院	栃木	1 分 8 秒 470	2	11 秒 146	2	27 秒 13	1	2	5		
3	長島 大介	作新学院	栃木	1 分 8 秒 990	3	11 秒 348	6	28 秒 40	4	3	13		
4	山下 一輝	誠英高校	山口	1 分 9 秒 330	4	11 秒 210	3	29 秒 16	8	4	15		
5	磯田 旭	作新学院	栃木	1 分 9 秒 961	5	11 秒 416	8	27 秒 85	3	5	16		
6	新納 大輝	鹿実	鹿児島	1 分 11 秒 120	12	11 秒 355	7	28 秒 80	5	6	24		
7	魚屋 周成	日出暁谷	大分	1 分 10 秒 590	7	11 秒 586	12	29 秒 35	12	7	31		
8	沢田 勇治	誠英高校	山口	1 分 10 秒 660	9	11 秒 642	14	29 秒 43	13	8	36		

4kmチーム・パーシュート

推薦順位	氏名	学校名	都道府県名	選考会の成績							
				1kmタイムトライアル		順位	3km個人追い抜き		順位	FS200m	
1	相笠 翔太	白河実業	福島	1 分 10 秒 950	10	3 分 42 秒 30	1	11 秒 564	11		
2	利根 正明	別府商	大分	1 分 10 秒 260	6	3 分 47 秒 25	9	11 秒 510	10		
3	柿澤 大貴	岡谷工	長野	1 分 11 秒 100	11	3 分 44 秒 93	6	11 秒 473	9		
4	田中 陽平	千原台	熊本	1 分 10 秒 630	8	3 分 48 秒 23	10	11 秒 730	18		
5	高橋 翔太	岐南工	岐阜	1 分 14 秒 360	24	3 分 43 秒 45	2	12 秒 355	24		
6	加藤 良治	岐南工	岐阜	1 分 12 秒 250	17	3 分 44 秒 86	5	11 秒 809	19		
7	岡崎 祥伍	岐南工	岐阜	1 分 11 秒 980	14	3 分 45 秒 73	8	12 秒 051	22		

※女子選手については、選考会の上位選手から順に推薦する。

1kmタイムトライアル	1位	Eddie Dawkins(NZL)	1分05秒427(大会新)
	11位	長島大介	1分09秒100
	13位	山下一輝	1分09秒694
500mタイムトライアル	1位	Josephine Butler(AUS)	36秒380
	10位	近藤美子	39秒838
男子10kmスクラッチレース	5位	雨谷一樹	
	14位	磯田 旭	
男子4kmスクラッチレース(オープン)	4位	山國 渉	
男子25kmポイントレース	10位	高橋翔太 2点	
		山國 渉 予選14位敗退	
女子7.5kmスクラッチレース	6位	柁原 彩	
ケイリン	1位	Jason Holloway(AUS)	11秒509
	6位	山下一輝	
		深谷知広 準決勝5位敗退	
		佐々木海 予選4位敗退	
チームスプリント	1位	日本1(磯田・雨谷・深谷)	48秒124
	2位	オーストラリア1	48秒268
	4位	日本2(山下・佐々木・長島)	48秒528

[2] 活動報告

[活動記録]

1月15日(月)

修善寺の250mトラックにて事前合宿(希望者6名参加)を2日間実施。「とにかく少しでも250mトラックに慣れたい」という選手の強い希望に基づき行われた。寒い時期であり練習は昼間の数時間だけと、限られた時間の中ではあったが目的は十分に達せられたと思う。そしていよいよ出発の日を迎えた。2台のレンタカーに分乗し成田へ向かう。成田空港でメンバー全員が集合。簡単なミーティングをし、物品支給、最終的な荷物の梱包作業をする。荷物の超過料金の問題もすんなりクリアできてホッとする。順調に搭乗手続きをすすめ、21時25分、予定通りに飛行機は離陸。10時間ほどの空の旅となる。

1月16日(火)

朝9時、シドニー空港に降り立つ。空港内を進んでいくとすぐに大会ボランティアが待っていてくれた。入国審査のゲートを優先的に通してくれ、時間のかかる荷物の受け取りにもきちんとつき合ってくれた。この先、いろいろな場面でボランティアの方が親切に対応し助けてくれた。頼りにできるボランティアがどこかにいてくれるので、通訳のいない我々には本当に有難かった。

その後自転車をトラックに積み、我々はバスに乗って競技場へ向かった。50分ほどバスに揺られたところで競技場に到着。戦いの舞台となるトラックを目にした選手達の表情からは好奇心だけでなく真剣さが見て取れた。しばらくして自転車を積んだトラックが到着。すぐに組み上げ、練習時間に備えた。この日の練習は、周回練習をした後にフライングダッシュを行った。選手達には各自のコンディションに合わせてやるように伝えたが、移動の疲れも見せず入念にダッシュを繰り返していた。

1月17日(水)

朝食は7時、その後トラックへ移動し練習。その間に監督会議があった。ライセンスチェック、ゼッケン配布、エントリーの確認があり、簡単なあいさつや説明があつて短時間で終了。

練習は至って順調である。また選手の順応性は高く、練習を見ていて何の不安も感じない。他国の選手ともうまく交わりながら、集団走行をしている。

この日の夕方には総合開会式が行われた。バスでシドニー中心部へ移動、会場となるエンターテインメントセンターへ。様々な国の、様々な競技の選手たちと顔を合わせる。レセプション(野外コンサート)が1時間ほどあり、さらに1時間ほど待った後、総合開会式が開始された。日本チームのサッカー、体操、フィギュアスケート、カヌーなどの選手と共に入場行進した。建物の裏側から会場内へ入ると会場の大きさにびっくり。観客席の最上部は照明と煙で霞んでよく見えないくらい。雰囲気はまるでオリンピックなどで見る総合開会式そのものである。座席に着くと、いくつかのセレモニーがあり、そして歌やダンスなどのアトラクションへと展開していった。出演者も学生のボランティア中心であり、完成度はともかくとして熱気溢れる舞台には感動した。すべて終了したのは21時ごろ。バスに乗り込むまでにさらに30分ほどかかり、宿舎へ帰ったのは22時すぎ。待たされることが多く、皆少々疲れてしまった。

1月18日(木)

8時朝食、10時30分に競技場へ移動。競技場到着後すぐに昼食をとり、レースまでの時間にウォーミングアップを行う。

14時、競技開始。オープニングレース、女子スプリントには近藤が出場。近藤は今ひとつスピードに乗れず13秒181で9位通過。1位通過の台湾選手は12秒340であった。続く1回戦で4位通過のマレーシア選手と対戦、先行策を講ずるが作戦通りに走れず敗退。敗者復活戦では作戦通り先行をし見事1位となった。2回戦で1位通過の台湾選手と対戦。力の差は0.8秒あり、積極的に主導権を取りにいく作戦で一矢報いようとするが力及ばず、敗退した。

男子スプリントは深谷と雨谷が出場。深谷は11秒058で3位通過、1回戦は力の差を見せつけ勝利。2回戦、相手のマレーシア選手とのタイム差は0.2秒。だが相手選手のテクニックもなかなか高く3本目までもつれ込んだ。3本目、深谷は非常にうまく先行を見せ勝利を収めた。翌日の準決勝に駒を進める。雨谷は11秒270で8位通過。1回戦のオーストラリア選手との対戦は力よりもテクニックの差が出てしまい敗退。敗者復活戦は難なく勝ち上がり、2回戦、1位通過のオーストラリア選手と対戦。相手はただ1人の10秒台で、テクニックも一枚上手である。1本目はまともにレースをさせてもらえず取られたが、2本目スローペースに持ち込み、得意のダッシュで相手を引き離し取り返す。しかし3本目、またも相手にうまく先行に持ち込まれ、ゴール前半車身ほどまで詰め寄るが届かず敗退。翌日の5～8位決定戦にまわることとなった。

続いて行われたのは個人追い抜き。女子は柁原が出場。序盤は予定通りのラップを刻んだが中盤からやや遅れだし、結果2分40秒934の11位。1位はオーストラリア選手で2分27秒489(大会新記録)。男子は高橋、長島が出場。高橋は3分40秒547で16位、長島は3分48秒180で23位。1位選手のタイムは3分25秒127(大会新)であった。この種目、男女とも日本選手と世界との差は非常に大きい。国内のレースと違いスピードの勝負、一進一退の攻防が見られ、見ていて非常に面白い。その違いの理由は「250mトラックであること」に他ならない。

この日の最後の種目、スクラッチ予選。女子5kmのレースに柁原が、男子7.5kmのレースには雨谷、磯田が出場。いずれも予選通過を果たすが、1周16秒前後のハイペースで積極的に展開されるレースに翻弄されていた。だが一瞬のスピードは決して劣っていないので、勝負所を見極めうまく位置取りをすることが重要だと感じた。

1月19日(金)

14時より競技開始。まず500mタイムトライアルに近藤が出場。結果は39秒838で10位、1位選手は36秒380で大会新。1kmタイムトライアルには長島と山下が出場、長島は1分09秒100で11位、山下は1分09秒694で13位だった。1kmの1位タイムは1分05秒427で大会新。それぞれ目標タイムに及ばず残念であったが、自分の走りを振り返り、また強い選手の走りを観て課題を発見したことと思う。とにかく外国選手は重いギアを使用している。スタートの加速よりも後半の伸びを重視した走り方である。

深谷のスプリント準決勝、ニュージーランドの選手(1km優勝者)と対戦。予選タイムは相手が上である。お互いに先行を狙うレースとなった。深谷が1本目うまく先行を取り先取。2本目は相手に先行されまくりに回ること。相手も合わせるがゴール前見事に差しきり勝利を決める。決勝戦、オーストラリア選手との対

戦。1本目、気負いからか、今まで思い切って後ろから仕掛けてられていた、ラスト1.5週のバックで仕掛けるタイミングを逃し、そのまま先行され逃げ切られる。2本目、同じような展開となり後ろから攻めることになったが、ラスト1.5周、今度は迷うことなく先攻した。最後ゴール前詰め寄られるが逃げ切りを決めた。1対1、さあこれからというところだったが、相手が3コーナーで自転車から降りて倒れている。疲労から体調不良となってしまう、回復が見込めないということで棄権。少しあっけない幕切れとなったが、優勝を決めた。いくつもの接戦を制しての優勝は非常に嬉しく、価値のあるものだと感じた。

1月20日(土)

朝食8時、10時30分競技場へ出発。競技場ですぐに昼食を摂り、周回練習を行う。この日は12時半から17時過ぎまで相当な過密スケジュールである。

チームスプリントは2チームエントリーした。Aチームは磯田、雨谷、深谷。Bチームは山下、佐々木、長島である。予選はAチームが48秒196で1位。Bチームが48秒375で4位。それぞれ1-2位決定戦、3-4位決定戦へ進みAチームは優勝、Bチームは4位となった。Aチームは中盤まで相手にリードされる苦しい展開であった。2番手から3番手にかけて盛り返し相手と0.144秒差のぎりぎりの逆転勝利に我々も観客も興奮した。

ケイリンには山下、深谷、佐々木の3名が出場。山下は1回戦、準決勝といずれも残り1周半から先行し、逃げ切りをきめる積極的な走りで決勝進出。決勝は後方からのレースとなり、これまで同様、先行すべく上昇するがうまく合わされずと後退、6位となった。深谷は前日のスプリント、そして当日のチームスプリント(3走)を2本走っていたためすでに疲労困憊。ケイリンについては精彩を欠いてしまった。1回戦はなんとか3位に入り突破するも、準決勝は追走でいっぱい状態で5着に沈んだ。佐々木は1回戦、後方に追いやられ、全く前に出ることができず5着に終わる。この日まで出番がなく満を持しての登場であり、こころを期待していただけに残念であった。ケイリンではスタート後の位置取りが重要である。前方に位置することができればかなり有利である。誘導のままのペースで流し先行に持ち込めば、後方からのまくり、追い込みは相当力がないと決まらない。

ポイントレースには高橋、山國が出場。高橋は位置取りに苦労しながらも2点を取り8位で予選通過。決勝はさらにハイペースの展開となり、ますます自由に動けず後方に追いやられる展開。ペースのゆるんだ瞬間に飛び出しを試みるも逃がしてもらえず、中盤で力尽き棄権した。山國は予選敗退。集団から飛び出す場面も見られたがポイントを獲得できなかった。優勝はニュージーランド選手。オーストラリアチャンピオンに対し、ニュージーランドがチームプレイで勝利した。非常に早いペース、どんどん逃げを狙う展開など日本のレースしか知らない選手が始めて走って通用するレースではないと感じた。

1月21日(日)

朝食8時、9時に競技場へ移動。ロードレースは競技場横のクリテリウムコースを使って行われた。予選は20分+3周、決勝は45分+3周である。アップダウンはないがテクニカルなコーナーがあり、またこの日は強風の中で行われたため選手は苦しみながらも積極的に逃げていた。日本チームも余裕さえあれば、ロードレーサーを持ち込み参加すると良いだろう。

[大会について]

大会の雰囲気はいたって和やか。エントリーの変更などにも柔軟に対処してくれる。国際大会ではあるが草レースのような雰囲気があり、どの種目に何人エントリーしても問題なさそうである。プログラムを見ながら、選手が1日1種目走ることができるように考えてエントリーすることもできると感じた。

会場は屋内板張り250mトラック、Dunc Gray Velodrome というインドニー五輪で使用されたトラックである。屋内なので天候に左右されることはない。選手全員をトラックの内側で管理できるし、競技場自体が非常にコンパクトなので役員の数は少なく済む。競技運営に必要な物は常設されているので、思い立ったらすぐに大会が行えそうである。

[自転車、機材について]

タイヤは国内で使用している物と同じでほとんど問題ない。一部不安を感じた者は、レースまでに板張り

用タイヤへの交換を願っていた。

ギア比については男女とも52×15、49×14の大ギアを使用していた。特に驚くべきは女子。練習でも男子に混ざってハイペースの周回をし、男女差をまったく感じさせない。また女子ポイントレースで落車が起ころうとも全員が「早く直してくれ」と叫び、再乗していた。本当にたくましい……。

〔食事について〕

朝食と夕食は宿舎で、昼食と夕食は観客席の横にあるレストランで食べた。パン、時にはパスタやジャガイモを主食とし、おかずは肉中心。味付けが大ざっぱなので、自前の香辛料で味付けしながら食べたこともあったが、適応力があれば十分対応できるレベルであろう。長粒米やカレーがでてきたり、メニューや味付けに我々外国人を意識していることをうかがわせる場面もあった。

はじめの頃は「ごはんが食べたい」という者もいたが、日が経つにつれて徐々に慣れていった。実は最高のパフォーマンスを発揮してもらおうと「ごはん」を準備する計画で、炊飯器＋変圧器、米15kgを持ち込んでいた。しかし、いざ米を炊こうとコンセントをつないだ瞬間に壊れてしまった。今回はそのような事情もあり、現地の食事に適応する能力を鍛えてもらうこととなった。

全体を通して感じたことは日本選手の食事量の少なさである。現地食への適応力も関係するが、外国人選手がパンやパスタを山盛り食べている姿と見比べると、少し物足りない感じがした。

〔宿舎について〕

宿舎は Southern Cross College という大学の施設。空港からバスで1時間弱、また競技場までバスで5分ほど。大会期間中は全ての移動を主催者の準備したバスで行うことができた。部屋は選手、スタッフ共にシングルが与えられ、シャワー、トイレは共同。コインランドリーもある。海外レースの宿舎としてはかなり良い環境であるといえるだろう。

〔総括〕

ミーティングでは選手たちに積極性の大切さを伝えた。外国の人々とコミュニケーションをとるためには欠かせないことである。そしてレースにおいてはさらに重要なことである。250mトラックでのレースは、日本と違い勝負どころ(もがくポイント)が早く訪れるし、また日本のようにゴール直前の差は成功しない。日本のレースとは全く頭を切り替えなければならないことを、実際に走った選手たちは感じたと思う。今後どんなレースでも、その場その場の状況を正確に判断し、チャンスを逃さない積極的な走りができるようになれば、さらに良い結果が出せるだろう。

最後に、本事業の実施にかかわり多大なるご協力をいただいた関係の方々、特に選手の所属校と家庭には、心より感謝申し上げたい。

[1]オーストラリア選手権 競技結果

ス プ リ ン ト 1位 Scott SUNDERLAND 10 秒 760
 2位 Byron DAVIS 10 秒 912
 3位 Daniel ELLIS 11 秒 023
 13位 坂本貴史 11 秒 637 予選不通過
 16位 飯塚隼人 11 秒 812 予選不通過
 17位 三木翔太 12 秒 263 予選不通過

3kmインディヴィジュアルパーシュート 1位 Cameron MEYER 3 分 19 秒 632
 2位 Hayden JOSEFSKI 3 分 22 秒 723
 3位 Leigh HOWARD 3 分 23 秒 401
 16位 須永優太 3 分 33 秒 697 予選不通過
 21位 不破将登 3 分 36 秒 864 予選不通過
 23位 坂本貴史 3 分 40 秒 716 予選不通過

1kmタイムトライアル 1位 Scott SUNDERLAND 1 分 05 秒 027
 2位 Leigh HOWARD 1 分 06 秒 502
 3位 Jeremy HOGG 1 分 06 秒 554
 11位 松川高大 1 分 08 秒 936
 14位 飯塚隼人 1 分 10 秒 440
 19位 三木翔太 1 分 12 秒 403

スクラッチレース(10 km) 1位 Leigh HOWARD
 2位 Cameron MEYER
 3位 Jack BOBRIDGE
 20位 関根章人
 21位 大島将人
 DNF 真船圭一郎

2.5 km ポイントレース 1位 Cameron MEYER 23 点
 2位 Hayden JOSEFSKI 17 点
 3位 Jack BOBRIDGE 11 点
 DNF 須永優太

ケ イ リ ン 1位 Daniel ELLIS 11 秒 065
 2位 Byron DAVIS
 3位 Scott SUNDERLAND
 4位 松川高大
 関根章人 予選4位不通過

チ ャ ム ス プ リ ン ト 1位 Western AUSTRALIA 47 秒 680
 2位 Queensland 48 秒 266
 3位 New South Wales 48 秒 800
 4位 日本(飯塚・松川・関根) 49 秒 60 ※オープン参加のため予選のみ

4kmチームパーシュート 1位 Western AUSTRALIA 4 分 17 秒 617
 2位 Victoria 4 分 21 秒 474
 3位 Queensland 4 分 21 秒 789
 6位 日本(不破・須永・大島・坂本) 4 分 37 秒 621 予選不通過

[2]総評

この度、ジュニアの年間を通した強化策の一つとして強化指定選手トラック短距離陣の海外研修合宿が実施された。研修内容については、現地で自転車競技活動をしている吉井功治さん(日本事務代行)に計画していただいた。2週間という期間にできるだけ多くのことを吸収できるようにと、3つのレース参加(メルボルン・クラブレース、オーストラル・ホイールレース、オーストラリア選手権)とトラック練習を計画していただいた。オーストラリア自転車競技連盟やトラック競技場など多くの機関との折衝をしていただき、そのおかげで充実した研修をすることができた。

[遠征の準備]

1月中旬に和歌山県和歌山競輪場にて合宿を実施。オフシーズンで鈍っている身体感覚を取り戻すことを目的に練習を行った。住んでいる都道府県の気候によって選手のコンディションは様々であり、この合宿の練習によって急激に調子を上げてくる者もいた。当然、この合宿だけでは不十分であり、あとは現地へ入ってからトレーニングに期待をしながら出発の日を迎えた。

[トラック練習、メルボルン・クラブレース、オーストラル・ホイールレース]

メルボルンで使用した競技場は 250m、板張りの屋内競技場である。天候に左右されない室内というのは非常にうらやましく思う。日本にもこのような室内 250m板張りのトラックが是非とも欲しいと思う。
2/1(水) 13時より3時間のトラック練習をおこなった。9名中8名の選手が 250mトラックは初体験。十分な説明を行ってから練習を開始した。本日の目的は 250mバンクに慣れることと、今現在の選手の力を把握することである。まずフライング 500mを計測し、それをもとにチーム分けをして団体種目の練習を行った。まだまだ選手の本当の力や適性で分からないことが多く、団体種目については頭を悩ませた。

2/2(木) 午前中にトラック練習を2時間実施。スタンディングと複数でのものがき練習を行った。その後は19時開始のメルボルン・クラブレースに備えて休養とした。今回のレースは、地域の草レースといった感じでレベルはそれほど高くなく、オーストラリアのレースに慣れるには丁度良かった。種目は①9kmスクラッチレース、②9kmポイントレース、③10kmモーターペーサーレース(※このレースは、スタートからバイク退避位置まで時速55km/hでバイクが誘導し、バイクの後ろで選手たちは1周毎の先頭交代を行っていく。先頭交代の後、集団のどの位置に入っていくかは自由なのでそこが駆け引きの重要なポイントとなる)の3つ。それぞれA、B、C、3つのグレードに分けられている。選手は実力に合わせてどのグレードで走るか選択し、全てのレースを同じグレードで走ることになる。我々はAグレードに7名(須永、大島、松川、坂本、不破、関根、飯塚)、Bグレードに2名(三木、真船)エントリーした。昨日初めて250mトラックを走って、今日初めて集団でのレースを行うので、選手は緊張気味だったが我々スタッフも同じ気持ちであった。しかし選手たちの適応能力はなかなかのもので見事にレースを走っていた。ただ1名、三木のみが最初のスクラッチレースで他の選手と接触、落車をしてしまい、その後のレースもDNSとなってしまった。

競技結果:

Aグレード・・・ポイントレース優勝 須永
スクラッチレース3位 大島
Bグレード・・・ポイントレース優勝 真船
ペーサーレース優勝 //

大会プログラムやコミニケ、リザルトなどの印刷物はほとんど無いので、その他の選手の詳しい結果は分からない。その辺りはいい加減であるが、運営全体については無駄なことは一切省いてあり、極めてスムーズであった。例えばタイムテーブルなどは始めから作らず、一つのレースが終わればすぐに次のレースを始めるという形で次々と進めていく。合理的であるし、またそれは観客を飽きさせない工夫であると思った。

22:30 レース終了。これからのレースも同様の時間帯で行われることが多くなるが、我々にとっては経験のない日程なので少々戸惑う。

2/3(金) 少し遅めに起床。10:00~12:00 と 14:00~16:00 の2回のトラック練習を行った。午前は軽いギアのみを使用。回転重視、回復に努めた。午後はチーム種目の練習を実施。チームスプリントはスタンディング 250mを3本、チームパーシュートはフライング 2000mを2本行った。修正を加えながら少しずつは良

くなってきている。昨日のレースに続いてなかなかハードな一日となった。

2/4(土) ゆっくり起床し、この日は昼食をかかて市内観光をした。昼食後にはビーチへ足を伸ばし、少しリフレッシュを図る。晴れてはいるものの、残念ながら海水は冷たく肌寒い。海岸ではビーチバレーボールの大会が行われ大変な賑わいを見せていた。こちらの自転車以外のスポーツ文化に少し触れることができた。名残を惜しみながらビーチをあとにして、ホテルにて準備を整え競技場へと向かう。

会場はホータフォンアリーナという複合スポーツ施設の250mトラック。当然、室内の板張りである。100年以上の歴史を持つオーストラリア最大のトラックレースというだけあって観客が多い。またシェンケリーのようなスター選手も多くのレースに参加しており、単なるレースではなくて娯楽的要素を持った立派なイベントであると感じた。選手達はこのような熱気あふれる雰囲気の中で、スター選手達と肩を並べてレースを走ることができ、これ以上ない経験をしたと思う。

参加選手のレベルはメルボルンクラブレースよりさらに高く、中長距離の種目であっても相当なスピードレースであった。選手たちはレースの展開やペースと自分の足との兼ね合いを考えながら、国内では使ったことのない大きいギアに挑戦していた。失敗と成功を繰り返しながら自分の適正ギアを知っていく必要があるため、その良い機会になったと思う。

レースについては、賞金の懸かったメインイベント「オーストラリア・ホイールレース」において大島、須永、関根が決勝へ進んだ。このレースはハンディーキャップレースで大島は-110m、須永は-110m、関根は-90mの位置からスタートした。予選も含めて、このレースのスタート位置はエントリータイムに基づいて決まるのだが、あまりにも正直にベストタイムでエントリーしたため後方からのスタートとなり、大変厳しいレースを強いられた。この決勝レース、健闘むなしく上位には入れず、賞金獲得はならなかった。その他、モーターペーサーレース、ポイントレース、エリミネーションレースなどが行われたが、主な結果はBグレードエリミネーションレース須永2位が最高で、皆よく奮闘していたが3位以内には食い込めず、草レースとはいえオーストラリアのレベルの高さを思い知らされる結果となった。今回のレースで特筆すべきは須永と関根の走りであった。須永はとて競走センスが良く、レースの流れを読みながら勇気を持って自ら動くことができる。関根は小柄ながらスピードが豊かで、今回のケイリンでは果敢な先行を見せてくれた。予選のレースでケリー選手と一緒に走ることもあったが、物怖じすることなく打鐘とともに一気に主導権を取り、見事な2周逃げを見せた。結果は3着であったが素晴らしかった。オーストラリア選手権での走りに期待を抱かせてくれた。

レースは19:00開始、22:30終了で、終了後は軽く食事をしてホテルへ戻り、それぞれ荷物をまとめる作業をし、就寝。

2/5(日) 朝6:00より自転車の箱詰め作業をし、朝食もそこそこに空港へ向けて出発。ワゴン車1台で3便に分けての輸送であったこと、またレンタカーの返却作業などもあり、11:50発の飛行機に乗り込んだのは出発ギリギリであった。アデレード到着後、オーストラリア選手権の会場であるシルバートロームへ行き自転車を格納、昼食をとってホテルへ入る。この日は18:00から1時間半のトラック練習を行った。短時間であり、団体種目の足合わせくらいしかできなかった。

【試合内容】

2/6(月) オーストラリア選手権第1日目。12時からの監督会議は、和やかな雰囲気、なおかつ無駄なく短時間で終わった。ジュニアカテゴリーへの参加は9チーム、54人であった。この日は午後の部で3kmインディヴィデュアルパーシュート、夜の部で1kmタイムトライアルが行われた。インディヴィデュアルパーシュートではそれぞれに目標タイムを確認し、スタートさせた。タイムトライアル系種目は今回の遠征では初めてであり、彼らがどれだけ走れるか、どれだけ通用するのかを計る意味で重要な種目だった。タイムについては須永が3分33秒、不破が3分36秒、坂本が3分40秒とそれぞれがベストに近い走りをして安心した。選手達は不安感からスタートをおさえて入ってしまったためタイムが伸びなかったと考えられる。それを改善すれば今後さらにタイムを伸ばすことができると感じた。ただ、オーストラリア勢の走りは我々にもっと厳しい現実を突きつけるものだった。予選の1番時計は3分19秒。他にも3分20秒台が8人もいた。日本トップタイムの須永でさえ対戦相手に追い抜かれるなど、中距離種目のこの実力差はとてつもなく大きい。また選手層の厚さは脅威的である。話によると、ナショナル代表選手選考においてインディヴィデュアルパーシュートが重要視されており、この種目から多数の選手が選ばれるため、選手達はそこに的を絞ってくるのだという。日本でいえば『短距離選手』のスピードを持った選手が、持続的なトレーニングを積んでこの種目で競い合っているのである。日本ではあまり重視されていない種目であるが、日本の

競技力を本当に充実したものにするために、改めて取り組んでみる価値はあると思った。1kmタイムトライアルは松川がかるうじて1分8秒台であったが、飯塚は1分10秒、三木1分12秒と不発に終わってしまった。この結果については走り方などよりもコンディションの問題であったと分析する。

2/7(火) この日は午後の部でスプリント予選、夜の部で25kmポイントレースがあった。まずスプリント予選。これまでトレーニングをしてきたメルボルンのトラック(DAREBIN International Sports Centre、ポーターフォンアリーナ)との違いに対応しきれなかったこと、適切なギアを選択できなかったことが原因でタイムが伸びなかった。結果は坂本の11秒637が最高で、予選通過はならなかった。ポイントレースは、開始時間が我々の予測よりもはるかに早く、ウォーミングアップが少し足りないままのスタートとなってしまった。これまで非常に良い走りをしてきた須永だけに残念であった。時間の確認はスタッフの責任であるので今後の教訓としたい。レースには各チームが3名ずつ出走してきており、それぞれがレベルの高いチームプレーをして戦ってくるので、日本選手が1人で戦うには大変厳しかった。ポイント獲得を狙うもアシストの選手に阻まれ、また先頭集団を追っては足を使わされるという展開で健闘むなしくリタイアとなった。

2/8(水) この日はレースが無く、昼までゆっくり過ごす。夕方1時間半ほどトラック練習を行い、夜の部のレースを観戦した。

2/9(木) 午後の部で4kmチームパーシュート、夜の部で10kmスクラッチレースがあった。チームパーシュートは目標タイムを4分30秒とした。現在そのタイムが出るとは考えにくかったが、相手チームに追いつかれないためにも、そして今後のためにもこれくらいのタイム設定をする必要があると考えた。実際、そのペースを保つことは難しく、後半、遅い時には17秒5まで落ちてしまった。追い抜かれこそ免れたがギリギリといったところであった。今回は短距離選手中心のチーム構成であり、チームパーシュートを走るには力のバランスが悪かった。しかし須永、不破の両選手は立派な走りを見せ、チームの構成と練習次第では十分4分20秒台を狙える可能性を感じさせてくれた。それにしても他チームのレベルの高さに驚かされた。ジュニアの部の最高タイムは4分17秒617。その他4分20秒台が4チーム。30秒台は日本のみ(4分37秒621)であった。エリートの優勝タイムにいたってはなんと4分13秒216。そのスピードと迫力に圧倒されてしまった。10kmスクラッチレースは大島、関根、真船の三人がエントリー。ポイントレースの反省から、早い時間から入念なウォームアップをして臨んだが序盤からのハイペースとチームプレーに翻弄されてしまった。なかなか前に出ることができず、前半は後方でチャンスを待つしかなかった。中盤に真船はカウンターの逃げを試みるなど積極的な走りを見せたが実らず、再び集団後方へ追いやられてしまいリタイア。関根はハイペースの展開に追走がいっぱいで最後にはちぎられてしまう。ゴールスプリントに期待していただけに残念であった。大島は後半になり、集団の中ほどに位置を保ちゴールを狙った。先頭から10番手あたりの位置でラスト1周に入り巻き返しを図るが、運悪く他選手と接触。その結果、アウト側へ外へふくらんだ所を反則ととられ、9着でゴールするも降格21位という判定。惜しい結果となってしまった。

2/10(金) 夜の部でケイリンが行われた。関根の予選レース、スタートは7コースであった。何とか前の位置を取りたいところであったが簡単にはいかなかった。メルボルンでのケイリンレースのような果敢な走りが見られず、今回は消極的なレースに終わってしまい、4着予選落ちとなってしまった。松川は堂々の先行を見せ、1着にて予選通過。決勝では、中段の位置からうまく流れに乗り4着でゴールした。位置取りの重要性、自分でレースを動かしていくことの難しさを感じたと思う。

2/11(土) 夜の部において、チームスプリントが行われた。こちらへ来て状態を見ながら選んだ現在のベストメンバーである。1走飯塚、2走松川、3走関根の順。1走は18秒500で、手元では1番のタイムであった。しかし2走、3走が平凡なタイムに終わり49秒602で第4位。日本チームはオープン参加ということで3・4位決定戦には進めず、ここで終了となった。予選1番時計はウエスタンオーストラリア。1走18秒971だが、続く2走、3走が非常に強かった。その後の決勝でも47秒502のタイムを出し優勝した。そしてオーストラリア選手権の最後の種目となったのが吉井功治さんの出場するポイントレース。40km、160周で行われたが、出走20名、完走8名という過酷なレースになった。各チームがチームプレーで戦う中、1人で戦うのは本当に厳しく、我慢の連続であった。ハイペースな展開から、中盤、エース格の選手3名の逃げが決まり上位3名が確定した。吉井さんも隙を見ては逃げを試みるが決まらない。最後、残り6周でも捨て身の逃げを仕掛けるがそれも決まらなかった。結果は第4位。「ラスト40周からは足が痙攣し、高校生達が見ていなかったらリタイアしたかも・・・」という言葉のとおり厳しいレースだったが、最後まであきらめずに果敢に走る姿を見て、選手達はきつと何かを感じてくれたと思う。

〔総括〕

本事業の実施決定から出発までが短期間であったために、関係の方々、特に派遣選手の所属校と家庭には多くの無理を聞いていただき、また多大なるご協力をいただいた。心より感謝申し上げたい。次年度に向けては、計画的に準備が進められるように早い段階での実施決定をお願いしたい。また自己負担金13万円は9名中8名の選手が、各家庭で負担していた。資金繰りの難しさはあると思うが、とにかく自己負担を無くす方法は無いものかと思う。また現地にて、本当に献身的にお世話していただいた吉井さん。選手として練習やレースに参加しながら、連日、我々の世話を走り回っていただき、大変な気苦労をおかけした。また走る姿を見せることで生徒達に熱い心を伝えていただいたことは何よりも有り難いことであった。感謝申し上げたい。

2週間、寝食を共にしてみても選手達の本当の姿が少しずつ見えてきた。そこで気になったことは代表選手にふさわしいマナーや人間性を身につけて欲しいということである。チームウェアの着こなし方や公共の場での行動など何度か注意をした。チームピットの設営や撤去などの際には、自分のことしかできない者がいた。チーム全体の事まで気使いができる者は少なかった。自転車競技の遠征でありながら、そういった生活指導にストレスを感じてしまい、遠征の後半はそのような説教じみた話が多くなってしまった。

今回の遠征では貴重な経験をさせていただき、私自身にとっても大変良い勉強になった。生徒たちもおそらく同じ気持ちだと思う。しかし本当に重要なのは、彼ら自身が見たり感じたりしたことを、この先の競技生活に活かすことである。我々の最高の目標である世界選手権に向けての動機付けができたかどうか。世界のレベルを知り、本気でそこを目指す気持ちになってくれたならば、この遠征は成功だといえるだろう。

第2回全国ジュニア自転車競技大会 報告

強化委員 百々 敦史

11月5日、三重県四日市市で全国ジュニア自転車競技大会が開催された。この大会は、一昨年アジア選手権が開催されたことを記念して、地域の活性化を図ることと、自転車競技の拠点『聖地』を作っていくことをめざして開催され今年で第2回目を数える。小学生や中学生の部があり、またツール・ド・ジャパンという未登録者レースと併せて開催されるので、家族連れが多く会場は大変にぎやかである。

昨年は高校生登録の部の参加は33名、女子5名であったが、今年は男子103名、女子6名と大幅に増えた。北は岩手、南は鹿児島からの参加があり大変な熱意を感じた。これは強化指定選手の選考レースとなった効果であろう。人数的には選考レースにふさわしい規模になってきている。しかしながら、それに対してレースの距離が若干短く感じられた。

コースは、適度な登りとテクニカルなコーナーがあり、積極的な逃げるレース展開も可能なコース。守りに入ってしまわない、果敢なレース展開を期待したい。アジア選手権では、さらにもう一カ所急勾配の坂があり勝負所となっていたが、その下り坂に危険箇所があるため、残念なことに本大会では除かれている。

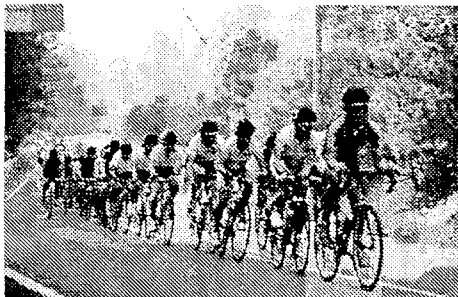
第1回目は少し寂しい感のあった大会だが、第2回目となり徐々に盛り上がりを見せてきた。さらなる参加者を期待したい。

レースの内容や競技結果は、下記シクリスムエコーのとおり。

シクリスムエコー 2006.11

第2回全国ジュニア自転車競技大会

登録高校男子は紀北工業高校の木守が優勝



11月5日、三重県四日市市水沢・桜地区に於いて第2回全国ジュニア自転車競技大会が開催された。前日には地球環境保全に貢献という理念にもとづき、国内外で植樹活動に取り組んでいるイオン環境財団の岡田理事長、井上四日市市長とともにコース沿道に桜の成木200本の植樹が行われ、「環境にやさしい自転車」をコンセプトとした、地域に根づいた大会取り組みが披露された。

前夜祭では、愛三工業チームによるコース解説がおこなわれ参加選手たち



コース沿道に植樹を行う岡田理事長(左)と井上四日市市長(中央)

は熱心に聞き入り、また地元特産品も振舞われ最後の大ビンゴ大会も大いに盛り上がり盛会のうちに終了した。また、2日間にわたってプロMTBサイクリスト山口孝徳氏によるサイクル教室も開催されて、大賑わいであった。

大会当日は好天に恵まれ、各クラスで熱戦が繰り広げられた。女子中学生のクラスを制した岩田はその走りに注目を集めた。同時スタートの女子高校生の先頭集団につけ、ゴールまで積極的に先頭を引く姿勢には、高い将来性が感じられた。

A-1クラス(登録男子高校生)では昨年を大幅に上回る103名のエントリーがあった。展開は、厳しいサバイバルレースとなり、残り2周、木守を含む3名が集団から抜け出し、一時は第2集団に1分の差をつけ、これで逃げが完全に決まったかと思われたが、終盤、第2集団も猛烈な追い上げを見せ3秒差まで詰めた。しかし、木守がそのまま押し切りわずかな差で激戦を制した。

来年度以降、ジュニアのメッカ、そして選手層の拡大に繋がる大会として更なる発展を望みます。

(愛知車連 前田 達郎)

【競技結果】

第2回全国ジュニア自転車競技大会
(2006/11/05 三重・四日市市)

A-1登録高校男子(54km)

- 1 木守 望 紀北工高1:21:09.945
- 2 吉田 隼人 奈良 榛生昇陽1:21:09.997

- 3 入部 正太郎 奈良 榛生昇陽1:21:10.555
- 4 堀内 俊介 神奈川 横浜高校1:21:13.915
- 5 野口 正則 奈良 榛生昇陽1:21:14.321
- 6 望月 慶 埼玉 川越工高1:21:15.298
- 7 平井 栄一 神奈川 横浜高校1:21:17.172
- 8 藤村 純平 岩手 紫波総高1:21:17.291
- 9 澤田 賢匠 京都 鴨沂高校1:21:17.397
- 10 小黒 祐也 新潟 吉田高校1:21:17.535

A-2登録高校女子(27km)

- 1 明珍 裕子 鹿児島 鹿児島実 49:26.227
- 2 近藤 美子 愛知 愛工名電 50:25.642
- 3 内田 菜穂子 大阪 大倉高校 50:28.668
- 4 石井 愛 京都 花園高校 52:25.919
- 5 中根 礼音 愛知 愛工名電 55:45.414
- 6 吉野 茉莉亜 愛知 愛工名電 55:53.808

小学1・2年男子の部(2.4km)

- 1 松本 峻典 京都 南つづじヶ丘 4:56.258

小学3・4年男子の部(9km)

- 1 二村 航平 長野 穂高北小 17:38.509

小学5・6年男子の部(9km)

- 1 片桐 善也 新潟 日越小学 16:09.205

中学男子の部(27km)

- 1 元砂 勇雪 大阪 松原中学 43:37.278

高校男子の部(36km)

- 1 青木 啓道 愛知 春日井東1:02:57.606

小学1・2年女子の部(2.4km)

- 1 辻 菜葉 岐阜 三里小学校 5:38.198

小学3・4年女子の部(9km)

- 1 城所 里彩 愛知 矢作東小 19:39.198

小学5・6年女子の部(9km)

- 1 黒田 彩夏 兵庫 江井島小 17:42.184

中学女子の部(18km)

- 1 岩田 知夏 兵庫 大阪女学 32:58.627

高校女子の部(27km)

- 1 星野 真由 三重 桑名西高 52:27.551